

ホーソーンの世界にみる咎められる女性 —「ハッチンソン夫人」について

倉橋洋子

はじめに

ナサニエル・ホーソーン(1804-1864)は、1830年12月、26歳の時に短編、「ハッチンソン夫人」(“Mrs. Hutchinson”)を『セーラム・ガゼット』に発表した。この作品は、実在したアン・ハッチンソン(1591-1643)をテーマにした作品である。アン・ハッチンソンは、まだアメリカがイギリスの植民地であった17世紀初頭に、ピューリタン社会のマサチューセッツ湾植民地において教会の牧師を批判したために裁判にかけられ、その結果、彼女の思想は共同体の人々にとって危険、いわゆるアンティノミアニズム(反立法主義)であると追放された女性である。作品の「ハッチンソン夫人」は、内容が2つに分かれており、冒頭における19世紀初期に台頭してきた女性作家に対するホーソーンの批判と、アン・ハッチンソンの詳細な裁きの場面の描写から成り立っている。

従来の研究では、「ハッチンソン夫人」を本格的に取り上げることはまれで、ホーソーンの女性作家に対する批判に言及する際に引き合いに出したり、あるいはホーソーンの世界に登場する女性を論じる際にアン・ハッチンソンを改革者として引用することが目立っている。本稿では、アン・ハッチンソンと共同体、および女性作家とホーソーンにおける関係性を吟味し、共同体がアン・ハッチンソンを排除し、ホーソーンが女性作家を批判した共通する理由を考える。その際、過去の著名人を描いた後のホーソーンの世界、「おじいさんの椅子」(1842)等も参考に考察にする。

第1章 ハッチンソン夫人の雄弁さ

実在のアン・ハッチンソンは、ピューリタンに傾注したロンドンの英国国教会の聖職者であり教師であった、フランシス・マーベリーと、妻ブリジット・ドラ

イデンの娘、アン・マーベリーとして1591年に誕生した。父親は、娘のアンに当時の他の女子よりもはるかに良い教育を授けた。アンは昔からの知り合いの繊維商人のウイリアム・ハッチンソンと21歳の時に結婚した。やがて彼女は説教師のジョン・コットン(1584-1652)に師事するようになり、コットンが1633年にアメリカへ移民すると、ハッチンソン一家も1634年に移民した。夫はビジネス界で成功し、アン・ハッチンソン自身は病人の看護を行うようになった。間もなく彼女は自宅で女性達に対して最近の説教について分析する集会を主催するようになり、次第に男性たちもその集会に参加するようになった。

アン・ハッチンソンは「恩恵の契約」(covenant of grace)を主張し、植民地の牧師が「行為の契約」に傾いているとした。「恩恵の契約」とは、契約神学の「贖い(あがない)の契約」(the Covenant of Redemption), 「行為の契約」(the Covenant of Works), 「恩恵の契約」(the Covenant of Grace)のうちの一つであり、キリストを信じ、神の言葉に従うことで永遠の祝福が約束されているというものである。アン・ハッチンソンの主張はアンティノミアニズムであると、1637年から1638年のアンティノミアン論争へと発展し、ついに1637年に裁判が、1638年に宗教会議が開かれ、彼女はサチューセツ湾植民地から追放されることになった。

作品の「ハッチンソン夫人」では、アン・ハッチンソンは格別な「才能」と「強烈な想像力」を持ち、「宗教改革者」として際立った女性として描かれている(23:67-68)。¹アン・ハッチンソンの「強烈な想像力」は、ピューリタン社会が子供に悪影響を与えるとして嫌悪を示し、排除したものである。それは、17世紀末までに出版された子供の本に空想物語はなく、出版されたものは教科書、行儀の本、道徳の本が大半であったことに示されている。アン・ハッチンソンの「規律からそれた大胆な考え」は、ジョン・コットンの影響によるものであり、既にイギリスにおいて兆候を示していた。しかし、彼女は「無分別な行為」を公にすることは控えていた(23:68)。コットンがアメリカに移民した後、他の牧師では飽きたらなかった彼女はマサチューセツ湾へ移民した。しかし、そこでは平和を見出すことが出来ず、以下のように、「奇妙で危険な意見」を広め始めた(23:68)。

ホーソーン作品にみる咎められる女性—「ハッチンソン夫人」について

まもなく、彼女は植民地の特別な状況にありがちな奇妙で危険な意見を広め始めた。それは、植民地の一時的な支援のためには基本で欠かすことのできない原理からだったが、植民地の存在そのものを腐食していった。(23:68)

アン・ハッチンソンは英国では自制していたが、まだ未熟な植民地では、彼女の教義は必要とされていると感じて「奇妙で危険な意見」を広め始めたと考えられる。

ホーソーンは「ハッチンソン夫人」において、アン・ハッチンソンの影響力を語ることに重点をおき、論争の場で彼女が語った内容よりも、むしろ聴衆の様子に視点をおいて描写している。そのために彼らの様子は現在形で語られている。アン・ハッチンソンの第一の信奉者は、マサチューセッツ湾植民地の知事(総督)を1期務めたことのある、若い政治家のヘンリー・ヴェーン(1613-1662)で、彼は彼女への支持を隠すことなく、彼女の右手に立っている。彼の神秘的な目にアン・ハッチンソンと類似の「暗い熱狂」を読み取ることができることは、彼が「抜け目のない世俗的な洞察力」でもって彼女の主義を取り入れていることの証である(23:69)。彼はその「洞察力」により、彼女の主義が彼には「力と喜びのもと」になるが、社会には「変化と騒動」を引き起こすことが分かっている。ホーソーン作品、「おじいさんの椅子」によれば、ヴェーンは「ピューリタンの宗教的見解を取り入れて」イギリスを去り、マサチューセッツで人生を過ごすために移民し、素晴らしい才能と偉大な学問のために知事に選ばれた。変化を恐れず、判断力のあると思われるヴェーンには、アン・ハッチンソンの教義は「危険」ではない。しかし、結局ヴェーンはアン・ハッチンソンにまつわる論争等で1637年に植民地を去ることになる(6:28)。

アン・ハッチンソンに対して「公然の非難」をする牧師ばかりの中で、ジョン・コットンのみが例外である。「おじいさんの椅子」によれば、アン・ハッチンソンがコットンを「ニューイングランドで唯一本当に敬虔で神聖な牧師である」と宣言したことで事態が悪化した(6:27)。「ハッチンソン夫人」ではコットンはあまりはっきり彼女への支持を表明しないように少し下がり、彼女の左手に立ってい

る。コットンはアン・ハッチンソンに信奉されているにもかかわらず、曖昧な立場を取ったことで、アメリカにおいて生涯、会衆派教会を導くことができたのは皮肉なことである。

他の聖職者たちはアン・ハッチンソンが「煽動的な教義」を明らかにする時、彼女の前面に立ち、眉をひそめ、厳しいことばをささやく。彼女の一番前にいるのはヒュー・ピーターズで、彼女を「忌むべき異端者」の指導者として有罪を宣告するために突進することを抑えることができそうにもない (23 : 69)。

アン・ハッチンソンの影響を一番受けたのは以下に示すように聴衆である。

聴衆は様々な影響を受けており、無関心な人は誰もいない。年配の、成熟した意思の強い人たちの額に、断固とした反感を読み取るかもしれない。もっとも、あちらこちらに、長年信じてきた人々に対する信頼を揺るがせている人がある。一方、女性は震えて泣き、時々周囲に恐怖の絶望的な様子を投げかけている。その一方で、若者は怒り、いらだって前のめりになり、どのような無鉄砲な手段もいとわない様子だ。これらすべての激しい熱情をかきたてる雄弁さとは何か。その女性は彼らに向かって、道徳的に改良される余地がなく、権限を与えられていない男性たちに信頼をおき、彼らに従って無駄にも荒れ野へ入って行つたと告げる (そして、彼女の言葉を証明するために聖書からの文を引用する)。それゆえに、彼らの心は天へ自分たちを導いてくれると選んだ人々から離れていく。彼らは家から遠くへ誘い出された子供のように感じ、恐ろしい孤独に陥り、彼らの導き手の容貌が突然変化して、悪魔のような形相となるのを見る。(23 : 69 - 70)

「荒れ野」に関してはマルコによる福音書 (1:12,13)、マタイによる福音書 (4:1-11)、ルカによる福音書 (4:1-13) に記述がある、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けた後、霊によって荒れ野に送り出され、そこに40日間留まり、悪魔(サタン)の誘惑を受けたことが示唆されている。導き手を求めている一般聴衆に多大な影響を与え、動揺させたのは、アン・ハッチンソンの「才能」、「強烈な想像

ホーソーン作品にみる咎められる女性—「ハッチンソン夫人」について

力」,「雄弁さ」である。これらがマサチューセッツ湾植民地の共同体を震撼させるものである。特に彼女の「雄弁さ」は、この場に居合わせた人々の「静けさ」や「静かな祈る人の声」と対比されることで強調されている (Lang 11)。

第2章 共同体の恐怖

アン・ハッチンソンの行動は、もはやマサチューセッツ湾植民地の政府には耐えがたいものとなる。「おじいさんの椅子」によれば、当時の牧師は直接的ではないが、行政官と同様に植民地の統治を共有していた (6:27-28)。牧師も出席した彼女の論争の場において、「宗教的自由と民衆の安全とは全く一致しなかった」(23:70)。「偏狭な時代の原理は、世俗的な政策と教化された知恵によって追求されねばならなかった、まさにその方針を示していた」(23:70)とホーソーンはアン・ハッチンソンを受け入れない当時を「偏狭な時代」と認識している。異端者アン・ハッチンソンの「恩恵の契約」の教義を認めることは「宗教的自由」であるが、アン・ハッチンソンの話を聞いて民衆が動揺したように、為政者かれみれば「民衆の安全とは全く一致しない」。ルーシー・マドックスも指摘しているように、彼女の教義は「道徳的かつ霊的な指針を失って迷い、おびえる子供たちのように、若い植民地の不安定なまとまりを破壊する恐れがあった」(Maddox 16)。すなわち、彼女の教義、「恩恵の契約」が彼女の「雄弁さ」により民衆に受け入れられ、熱狂的な信奉者による「内戦」が起きかねない状況にあった。アン・ハッチンソンの教義が民衆に受け入れられる理由には、既述したように植民地という特別な状況において、「一時的な支援のために基本で欠かすことのできない」、大衆にはわかりやすい教義であったことがある。コットンを除いて牧師がみなアン・ハッチンソンに反対したのは、彼らは彼女に非難されたこともあるが、まだ未熟で不安定な共同体では彼女は受け入れがたい存在だったからである。ピューリタンが宗教的自由を求めてアメリカへ移民したにもかかわらず、宗教的自由を認めないことは皮肉なことである。

「ハッチンソン夫人」では、ニューイングランドにおいて初めて招集された宗教会議において彼女は有罪の判決を下され、次に民事裁判に召喚された。ホーソーンは「ハッチンソン夫人」においてその描写も現在形で語っている。裁判の

席で、一番上座に座っているのはジョン・ウインスロップ (1588-1649) である。ウインスロップはピューリタンの中でもイギリス国教会から分離しない非分離派とともにマサチューセッツ湾植民地を建設するために 1630 年に移民し、植民地の最初の知事になり、その後幾度も知事を務めたことのある人物である。アン・ハッチンソンの裁判の時には、ウインスロップが知事を務めていた。ウインスロップの隣にはジョン・エンディコット (1589-1665) がいる。エンディコットは、ウインスロップより先にセーラムに到着してウインスロップが到着するまで知事を務めた為政者であり、軍人のリーダーでもある。

彼らの前にアン・ハッチンソンが立っており、その様子は以下のように描写されている。

彼女の教義により恐怖に陥れられた、学識ある著名な多くの男性たちを彼女が見渡した時、彼女の目には半ば隠れた世俗的なプライドが一瞬ひらめく。(23 : 72)

ホーソーンはアン・ハッチンソンの目にひらめいた「世俗的なプライド」を描写することにより、彼女に対する批判を怠らない。質問に対してアン・ハッチンソンは周到に正確に答え、「抜け目なく」理由づけをする。しかし、以下の記述にあるように彼女は論争に興奮して突然「雄弁さ」を発揮し、思いを吐露する。

彼女は、教会の崩壊に気づき、より純粋でより完全な光を求め、イギリスで耐えてきた長い喧噪や、孤独な祈祷の日にかにあの光が与えられたかを語る。つまり、彼女は自分自身が、神に選ばれたと主張する人と神の刻印を押された人とを区別する特別な力があると主張し、彼女の天賦の才に溢れた目は、聖人の額のあたりに栄光を見ることができ、彼らの死に際に同席すると断言する。たとえ、天の仕事が邪魔されようとも、彼女自身が偽りの羊飼いかから真の羊飼いを分ける仕事を任されていると宣言し、その地の現在と未来の判断を公然と非難する。(23 : 72)

ホーソーン作品にみる咎められる女性―「ハッチンソン夫人」について

アン・ハッチンソンは当時では咎められること、すなわち神から啓示を受けたと口にするのである。教会や牧師の存在を脅かす彼女の発言は、当時の共同体の秩序を乱すことで、共同体にとって恐怖となる。結局、彼女は、マサチューセッツ湾植民地を追放された神学者ロジャー・ウィリアムズ(1603-1683)が建設したロード・アイランドへ行くことになる。彼女は夫や信者とともに移動するが、夫はそこで亡くなる。ホーソーンは、彼女の夫のことを皮肉を込めて「名高い女性のほとんどの夫のように、強い妻の重要でない単なる付属物」と述べている。ホーソーンは妻と夫の両者の成功はありえないと思っているようである。アン・ハッチンソンは、信者とともに現在のニューヨーク、当時のオランダ領で祈りの最中にネイティブアメリカンに襲撃され、彼女の娘、1人を除き全員虐殺された。その娘は、異教の宗教のもと、ネイティブアメリカンに育てられ、皮肉なことにキリスト教徒にはならなかった。

第3章 台頭する女性との共生

ホーソーンは、「ハッチンソン夫人」の冒頭において19世紀初頭の女性作家の台頭に意義を唱え、皮肉をこめて以下のように語っている。

女性の知性は決して男性の知性に影響を与えないし、女性の道徳でさえも決して男性の徳を作るものではない。自然のはっきりした区分線を任意の区分と間違える誤った鷹揚さや、批判に余念がなく、批判を和らげることのない慇懃さは上手く仕事を実行し、よちよち歩きの幼児期にある我が国の文学に、少女っぽい弱弱しさを加えた。その邪悪さは大きくなっている。それでもアメリカの女性の大勢は家庭的な人種である。しかし、無分別な煽動が持続し、彼女たちの心が炉辺から離れたら、女性のペンは男性のペンよりも多く、より多産になる。もっとも平等に奨励されたらではあるが。(社会の支持はわずかであるためにももちろん制限があるが、それらの制限の中で無限に増加している) インクのしみのついたアマゾンには、実際的な圧力を加えてライバルを追い払い、ベティコートは翻り、文学界で勝利をおさめている。(23: 66 - 67)

ホーソーンの女性作家に対する感情は複雑である。19世紀初頭のアメリカ文学は、まだヨーロッパの模倣に近く、アメリカ国内で出版された書物はイギリス人作家によるものの方が多かった。そのような時期にリディア・マリア・チャイルド（1802-1880）やキャサリン・セジウィック（1789-1867）のようなアメリカ人女性作家が、ネイティブアメリカンを主題にした作品を描き、話題になった。ホーソーンは、早くも16歳の時に作家になりたいと母親宛ての手紙で語っているが（15：139）、1828年に自費出版した最初の作品、『ファンショー』（*Fanshawe*）を出版後自主回収している。その原因は定かではないが、その後の作品と比較すると決して完成度が高いとはいえない。² 自分の作品に自信が持てないホーソーンは、女性作家の勢いを認めざるを得ず、脅威を覚えるがゆえに、女性作家をライバル視して「インクのしみのついたアマゾン」という女性蔑視とも受け取られかねない表現をしていると考えられる。もっとも、ホーソーンは女性作家が男性作家と同様に世間に奨励されているとは思っていない。ハッチンソン夫人から想起して女性作家のことを書いたホーソーンと、ハッチンソン夫人を追放したマサチューセッツの教会の牧師たちは、才能ある女性に対して同じ恐れを抱いたと思われる。すなわち、女性作家とハッチンソン夫人は、従来の秩序、女性は炉辺、家庭にいるべきという秩序を乱し、男性の仕事の領域に侵入し、男性作家や牧師たちの立場を危うくする存在であるという認識を持たせた。アリソン・イーストンは、アン・ハッチンソンが「自然のはっきりした区分線」を「任意の区分」と間違えたために咎められたと指摘している（Easton 34）。

しかし、ホーソーンの女性や働く女性に対する感情は、単純ではない。「ハッチンソン夫人」の12年後に出版された「おじいさんの椅子」（1842）では、ハッチンソン夫人に対する子供の同情心が描かれている。ハッチンソン夫人の話をおじいさんから聞いた子供は、「あの人達はかわいそうな女の人を森に追いやったのですか」（6：28）と尋ねるのである。また、ホーソーンは後に先駆的な女性の権利を擁護する女性思想家兼作家のマーガレット・フラー（1810-1850）と親交を深め、彼女の能力を認めている。さらに、後の作品、『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）では姦通を犯し、社会の秩序を乱す女性主人公を極めて生き生きと魅力的に描いている。

おわりに

26歳のホーソーンと17世紀の植民地の共同体は、未熟であるがゆえに、自分たちの存在を揺るがしかねない女性に恐れを抱き、彼女たちとの共生は考えられなかった。しかし、やがてアメリカ社会において宗教的自由が認められるようになった。また、ホーソーンが歴史的な人物としてアン・ハッチンソンを取り上げた根底には、ハッチンソン夫人に対する驚嘆が潜んでいる。その感情はその後の作品における女性の描写に反映されることになる。自分たちにとっての脅威の存在を受け入れるには、自信と成熟が必要とされるのである。

注

1. Nathaniel Hawthorne の作品からの引用は、本文中に巻数と頁数のみを括弧内に記す。
2. 『ファンシヨー』は、ホーソーンの処女作で大学生時代から執筆され、匿名でマシュー&ケーベンから自費出版された。しかし、ホーソーンは出版後に『ファンシヨー』を回収し、燃やしたとも言われているが、定かではない。確かなことは、回収されたが保存されていたものもあり、再版が可能であったこと、また1871年にケーベンがボストン公立図書館に贈呈したことにより、著者が明らかになったことである。

引証資料

- Easton, Alison. *The Making of the Hawthorne Subject*. U of Missouri P., 1999.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Eds. William Charvat, et al. 20 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-1988.
- Lang, Amy Schrager. *Prophetic Woman: Anne Hutchinson and the Problem of Dissent in the Literature of New England*. Berkeley: U. of California P., 1989.
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature & the Politics of Indian Affairs*. Oxford UP., 1991.

キーワード：女性作家、アンティノミアニズム、共同体、共生
(くらはし ようこ 東海学園大学 経営学部教授)